アジア女性交流史研究

第十八号

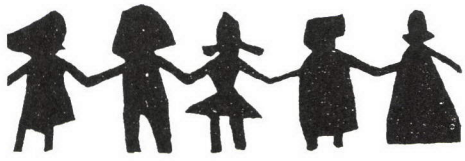
一九七七年二月

編集発行人・山崎朋子
カット・中山正美　32頁

アジア女性交流史研究

No.18

1977.2



編集発行人・山崎朋子
住所・東京都目黒区柿の木坂2－5－3
電話03－718－7030
頒価・200円　　送料・140円

■

野の雄鹿　牝鹿子鹿の　はてまでも
おのが野原を　追はれしぞ憂き

国も名も　家畑まで　うしなふも
失はざらむ　心ばかりは

古の　ラメトク達の　片腕も
ありてほしかり　若きウタリに

いにしへの　ユーカラカムイ　育てにし
姉君いまも　在らまほしけれ

オイナ神に　優れる神は　あらずとし
ウタリは伝ふ　ウタリの末に

石のごと　無言の中に　力あれ
ふまるるほどに　放て光を

石を割る　木さへある世ぞ　ウタリの子等
割りて進まむ　此の憂き世をば

幼なごろ　恐しかりし　有珠嶽に
今はこよなき　親しみぞもつ

目に触れぬ　神も住まはむ　有珠コタン
今も昔も　いつの世までも

（バチェラー八重子『若きウタリに』より）

■

三三目次三三

■エッセイ
限りなく日本人に近い朝鮮人 …… 金　錫粉・2
日本人の海外旅行 …… 鹿山啓子・3
大海を知ろう …… 三島昭子・4
16号掲載の清水悦子「差別について」を批判する …… 橋　史郎・5
清水悦子氏「差別について」について …… 佐野典子・6
■報　告
日本ママのフィリッピン訪問 …… 小塩れい・7
私のアジア女性交流史・5 …… インタラタイ・かつ代・10
— タイで山崎さんの著作をテキストに使う —
■記　録
アジア伝道者の妻として …… 梅森幾美・13
— その四 —
アイヌ・ユーカラ・その1
天界の神様と人間祖先の伝説語り …… 伝承・筆録・訳・葛野辰次郎・30
■ユーカラの記録を紹介する …… 岡本頼子・山崎朋子・18
生長語り …… 葛野辰次郎・20
◇編集後記・32　◇カット・中山正美

■〝限りなく日本人に近い朝鮮人〟

金　錫　粉■

ある芥川賞受賞作家の作品名をもじって在日朝鮮人二世をたとえてみると〝限りなく日本人に近い朝鮮人〟となるのだろうか。

私は在日朝鮮人二世。

勿論、生れは日本。

両親はそろって朝鮮生れの在日朝鮮人一世である。

小中高と十二年の学校教育の内、五年は日本の教育を、七年は民族教育をうけた。

一世の父から受けたものは強い民族意識とそれに比例する日本への憎悪感（のはずである）。そのせいか物心ついた子供の頃から今日の今でも朝鮮人である自分を忘れた事がない。それは日本にいるかぎり、忘れようとて忘れることのできない厳しい現実であり、私の人生観もしくは生き方の根源的基礎であると思うから。

先日、某テレビ局放送の「タウン」という番組を見た。

日本にいる混血児問題を扱った、実際の混血児が出演してのドキュメンタリタッチのもの。

彼らは一様に片親が日本人との混血児たち。勿論、生れも育ちも日本であり、英語と日本語を流暢に話し、全て日本人と変わりない生活をしている。

彼らには定まった国籍がなく、思うような職業もつけない。

彼らの内なる日本人意識はエキゾチックな外貌と矛盾し、自他ともにどっちつかずの悲しみとやり切れなさから自己を求めて旅に出るところまで全てドキュメンタリー的に描かれていた。

勿論、純血種の私には混血の彼らの悩みや深い悲しみは測り知れない。

しかし私が見い出した、彼らと私たち在日朝鮮人二世との類似点というか、あるいは共通点を取りあげると、ひとつには二重言語生活者であること。より日本人的な存在であること（感覚的には殆ど同じ）。さらには日本で生れ育ち文化まで共有しながら日本人にとっては異邦人であること。その上、職業の選択もままならぬということ等である。

日本と朝鮮の混血の二世もいるが全体でみると純血種の多い私たち二世も精神的には全て日本と朝鮮の混血種なのだ。

私自身、今までに日本人になりたい、日本人たろうと思った事はない。より朝鮮人的であろうと思ってはきたけれど……。

だが悲しきかな私はより日本人的なものを自分の内に見ている。

日常生活において朝鮮語と日本語を自由に操る在日朝鮮人二世なのだ私は。日本語で思考して朝鮮語で表現し、又はその逆をする、常に頭の中でこの翻訳事が繰り返されている。

日本人社会と朝鮮人社会のそのどちらに偏っても身の置きどころのない存在。

いわば民族としての原点のない人種。

本物意識にあこがれながらたえず、借物意識に苛まれるコンプレックスの塊り。

朝鮮人でも日本人でもない、紛れもなく〝在日朝鮮人〟二世。

一世は私の年老いた父をみても判るように既に亡びゆく、あるいは現に亡びつつある存在なのだ。朝鮮と日本の不幸な歴史の重みを背負いながら一世は亡んでゆく。

一世が渡日して辛酸をなめた時代から歴史は確実に大きく流れている。

二世から三世へと民族意識も又、風化しつつある時代に変わってゆく。

生活の中に溶け込んでしまった日本人的感覚と眠らんとする朝鮮人意識をもって二世、三世は日本で生き抜く事を真剣に考えている。

祖国を知らぬ私は両親を通して祖国の匂いをかいできた。今も祖国や自民族の事全ては間接的あるいは媒体を通してしか私たちには知るすべもない。自分の五感を通して祖国をみとめる事は今だにない。それがどんなにもどかしくやり切れないことか……。

そしてそれが私の心の中で常に激しい飢餓

意識として存在している。
私の友人の帰化日本人二世が言った。
「私たちはアメリカにでも生れていた方が良かった」と。
そこに歴然と肌の違い、人種の違いが認められれば自己を他民族として隠蔽しようなどとは思わないであろう、と。
私たちは二つの姓名をもつ。
日本人社会では日本人としての仮面をかぶりつづけて生きる事もできる。
友人はそうできる状況にあるのがより悲しいとも言った。
より不幸な事に我祖国は南北に分れている。日本と朝鮮の不幸な歴史が今もつくられている。全てはそこに起因することなのか。
ただひとつ、救いをそこに見るとすれば、ひとつの朝鮮＝統一された祖国である。
ともすれば生活する事に忙がされて真に生きる事を見失いがちになる。
統一された祖国＝ひとつの朝鮮を求める心が本物の朝鮮民族としての自己を取り戻すことにつながるものと信じたい。
原点をもたぬ二世の痛みにかけても。

（東京都　板橋区）

日本人の海外旅行

鹿山啓子

毎日大勢の日本人が、アメリカ、ヨーロッパ、アジアへと飛び立って行く。日本人は旅行好き、いや、お金持ちだから等とさまざまな受け取り方がある様であるが、確かにいつどこへ行っても日本人の旅行客にお目にかからない事はない。しかもその大半は数十名のグループ旅行である。グループ旅行なら個人に荷せられる責任は少ないし、言葉の心配もいらないし、何と云っても心強いものである。
最近こういった日本人観光客に対する好ましくない評判も耳にする。これはそれだけ多くの日本人が海外に出ている証拠であろう。団体でぞろぞろと歩けば、それだけで目立つのである。もちろん外国にもグループ旅行というのはある。面白い事に、日本人のグループは統制が取れている時は素晴らしく大人しいのである。これは反対に云えば、自主制が足りない事でもある。例えば一人がやっとの思いで何かを頼むと、次から次へ我も我もともう止まらない。これが買い物の際にも表われる様で、日本人は高い物でもさっさと幾つも買ってゆき、金離れが良いという事になっているのである。貴方が買うなら私もと、良い物であろうが、悪いものであろうが、またそれが高くてもとにかく買わねばならぬのである。海外旅行をした証拠に。私は仕事でよくタイに参りますが、ここも最近とみに日本人観光客の増えている所である。ここは又、常夏の国である所から、太陽好きのヨーロッパ人の観光客でも常ににぎわっている。彼らのにぎやかな事といったら、飛行機に乗り込んだ時からそれはもう大変なもので、眠るのも忘れ、飲んだり、おしゃべりしたりで、こちらの方がいささか参ってしまう事がある。旅行の楽しみ方は、行く場所、行く人の年齢によっても違うが、アメリカ人、ヨーロッパ人は太陽のふんだんにある自然の中で過すのが好きで、しかも出来るだけお金をかけずにである。だから彼らはバンコックでの観光もそこそこに、もっと太陽の強い海辺へと足をのばすのである。彼らがケチだと云うのではない。お金をかけるところにはうんとかけるのである。しかし無駄なものにはビタ一文出さない。お店の人がどんなに上手にすすめても、自分の好みに合わないものは一切受けつけない。
一方日本からバンコックにやって来る日本人の大半は男性だけのグループで、こういった人達は、旅行社の決めたコースに乗り、決められたお店できまった買物をし、夜のお遊

びの時までもバスを数台連ねて乗り込む。その様な場所で観光バスが止まっていれば、それはきまって日本人であるというのは現地人が一番よく知っている事のようである始めての外国でしかも言葉がわからないとなれば、とにかく責任者にまかせて、後についていって、何事も隣りの人と同じ事をしていれば安心には違いない。言葉の違い習慣の違いが、いかに我々に不安を与え、同時に誤解を生じ易いものか、外人の中で働らいている私自身が、今までによく体験している事なのです。

一朝一夕に違った言葉や習慣を覚える事は無理だし、又あれはいけない、これはいけないと気持ちを委縮させたり、反対に、相手の国を理解し、自分の国も理解してもらわねばと最初から気負い過ぎる必要もないが、せっかくの機会なのだから、貪欲な程の好奇心と、ちょっと勇気を出してみたら、旅は一層面白いものになるのではないだろうか。そうなれば、ほんの一言か二言でも言葉を覚える気になるかもしれないし、それがもっと旺盛な好奇心と自信を呼び起こすかもしれない友達も出来るかもしれない。そんな経験のある人は、後々までもその旅行が忘れられないだろうし、自分で旅をしたという感じもあろう。きっと旅の本当の楽しさも発見したであろう。名所旧跡めぐり、買物も旅行の大切な楽しみの一つであるが、それ以外に自分なりの旅の楽しみをみつけられたら、何故か自分が少し大きくなったような自信がついてくるのだから不思議である。

一人旅をすすめているわけではないし、日本人は国際人としてはダメだなどとも思っていない。日本人の持つ義理人情や奥ゆかしさは、外国人にはすぐ理解出来ないかもしれないが、大変良いものである。だから出来るだけいろいろな人々と接触し、外国人の持つ良い意味での合理性を合わせ持てたらと私自身も心がけているのです。

（アリタリア航空勤務）

■大海を知ろう■

三島昭子

返り見まして私共、戦時下より終戦の混乱期に学びそこで教育された歴史の中で、日本民族程優秀な人種は他に比類をみない。天皇は神様で、我々は神の子である。戦争も大和魂と神風が導いてくれるものと全く信じて疑わなかった事です。それらの総てが終戦と共に根底よりくつがえされてしまったのです。私はこれからの世の中に一沫の不安を感じたものでした。

私は、ある会社に勤めて居りましたが、親戚への依存生活から独立独歩の決心をし、日本人としては何らかの抵抗感はあったけれど、とに角日本人従業員としてのパスポートを取り、飛行場に勤務いたした事があります。

始めて見た未知の国を目の当りにした私は、すべての事柄に只驚歎の目を見はらずには居られませんでした。終戦後三十年の年月を経た日本企業は、いまや経済大国エコノミックアニマルとして君臨致しておりますが、あの当時は（終戦時）、余りにも日本の状態は戦争でいためつけられた姿でしたから。相手は物質面はもとより、近代化したシステムの充実、清潔きわまる建物、労働環境の設備・条件、衛生面と、余りにも日本とはかけはなれた先進国だったのです。いま山崎さんが底辺女性として取り上げていらっしゃいます＜女中＞の仕事、私は女中とは住込んで年中使われているものとばかり思い込んで居りましたが、ここでは＜女中＞は、八時間通勤制で帰宅時は洋服に着換えてサラリーマンの如く帰宅する人達をみて、私は、唖然と致したものです。私は井の中の蛙の如く、日本人は何と島国根性であったのか！戦争は大和魂や神風で勝てるはずもないのに、何も知らされていなかった小さい私達でしたから。

私は職場を通じて見る事の出来たアメリカ、東南アジア各国の民族性をある程度理解できた時、今まで過去に持ちつづけていたアジア諸国の人々に対する潜在意識に、改めて考えざるを得ませんでした。そして、反省の念を

抱かずにいられませんでした。我々日本人は、東南アジアの女性のあのよく手入れされた美しい黒髪、服装のセンスやマナーには、及びもつかなかったのでした。それらの人のなかで、体も、そして心までも小さかった私は、日本人独得の劣等意識を抱いて過しました。しかし、少しづつ自分の意識の変革をこころがけ、そのなかで徐々に自信を持てるようになって来たのです。

いまや日本は国際舞台に立ち、富国となりました。しかし、相も変らず、欧米諸国への劣等感、その反面アジア諸国への差別意識が根強く残っているのではないでしょうか。今、異色の女性史研究者として、アジア諸国への人種差別と偏見をなくそうとしていらっしゃる山崎様のお気持に私は心打たれ、我を忘れて感想を記したわけでございます。

私は、このようにして少しづつ目ざめて行った時、たまたま封建的な郷里の方で、もう十何年もその町に住まわれ、家までも新築し、隣近所に珍しい韓国のごちそうなどいただいている間柄の韓国人家庭であるのに、その家に可愛いなんら日本の女の子達と変らない女の子達が、家の中に入ったとか入らないとか近所で噂しているのを聞いて、その時無性にいきどおりを感じた事が忘れられません。また、私は、特にショッキングな出来事として、日本商品のタイでのボイコット運動をあげたいのです。今まで、日本人は誰しも支配者意識があるせいか、東南アジア諸国は日本商品なら何でも軽々と受け入れてくれると思っていましたのに、その日本人の自尊心を全くくつがえしてしまったのですから。

私たち日本人は今こそ大反省をして、アジア諸国に対する先人意識を変えねばなりません。日本は、もう井の中の蛙の田舎者ではないはずです。名実ともに国際人となるべき日が来たと思います。（津市在住）

■十六号掲載　清水悦子「差別について」を批判する■

橘　史　朗

①人間は、相手に勝った時すでに敗者に対して差別心が生まれている。戦争に限らず、学問、思想上でも、自分が優位にあると思えばそれは同じである。これは、意識するしないによらず、人間の〝性〟なのである（8頁）

私は他人に敗けることによって、もろくも崩れる人間の誇りについて考えさせられる。（10頁）――清水氏文章

※彼女の考えをたんてきに述べると、「敗けるから差別されるのだ。差別されたくなければ敗けなければよい」ということになる。差別に対する基本的考察に欠けているのみならず、極めて危険な考え方である。朝鮮人に対する差別は、日本が戦争に勝ったから生まれたのではない。朝鮮（人）支配をより合理的にするために作り出されたものである。部落差別も基本構造は同じである。それを今尚温存して行こうとするのは、それが資本（家）の要求するところであるからです。差別（差別心）を「人間の性」とする超歴史的な観点に立つ限り、差別はなくならないばかりか、新たな差別を生み出すことにもつながるのではないだろうか。

②人種差別をこの世からなくすには、混血にするしかないのではないか。そうすれば理解度も深まる。差別の根底にあるものは、その血である。私たちはもっと勇気を持って、アイヌであろうと、部落民であろうと、どこの国の人であろうと交流を持ち、解ろうと努力する必要がある。解らないからこそ心が歪むのである。それを助長するのは、差別される側の卑屈さと、ひっそりとかたまってしまう姿勢にもあるのではないか。被差別同胞が集って傷口をなめ合うことよりも、まず、差別する人々を無視することから始めるのが早道ではないだろうか？もちろん差別する側の方が悪い。しかし、他人の口に戸は立てられないし、まして、個人の思想の領域にまでは立ち入れない。打ってもひびかなければやがて打つ手は休もう。人間は卑屈な態度をとる人には尊大になるものである。他人は他人、我は我という気持で、己の血を恥じることな

く、厭うことなく、中傷に耐えるエネルギーを自分の仕事に向けてほしい。（9頁）――清水氏文章

※「差別される側の卑屈さ」が差別を助長するとは、何という言い草か。差別しておいて卑屈になるなと言うのは、なぐっておいて怒るなと言うのと同じで、差別責任の転嫁である。

「人間は卑屈な態度をとる人には尊大になるものである」差別者に尊大な態度をとられ、彼等に対する抵抗を弾圧されたとき、被差別者は悲しいことだが卑屈になることしかできないのだ。誰が好きこのんで、自ら卑屈になろうか。思考の順序が逆なのだ。ベトコンの抵抗がアメリカ人の侵略を助長したとでも言うのか。差別者の自己批判の欠如である。

清水悦子氏「差別について」について

佐野典子

本誌一六号所収の清水悦子氏の小論「差別について」には、簡単に読み過ごすことができない問題を含んでいる様に思われる。清水氏は、社会状況による民族性のちがいを把握しながらも「人種差別をなくすには混血にするしかないのではないか。」という誤った論理を述べておられる。何故差別をなくすのに差異をなくさなければならないのか。氏の論理をあてはめると、例えば女性差別は、女性がすべて男性化されれば差別はなくなるという馬鹿げたことになる。私は女性であるが、自分の特殊性＝生む性というものを捨てて男なみになることによって解放されようなどとは思ってもいない。そのようなものは真の解放ではない。そのことは民族差別でも同じではないか。

民族的差異、性の差異、あるいは、社会的位置の差異、職業の差異等々あらゆる差異に、優劣の価値が付与され、差別に転化される社会においては、清水氏に百歩ゆずって例え異民族結婚が行われて、民族間の差異が減少しても、差別はなくならない。日々新たに差別は生み出され、再生産されるのである。差別の問題は、決して、超歴史的に、一般論的に、語れないものである。

清水氏の論理の中で、私が一番気になるのは、異民族結婚によって、民族性を除去するという発想である。そうした一般的な発想が個別歴史的に実現された場合を考えていただきたい、というより、思い起こしていただきたい。日本が朝鮮を植民地として支配していた時のことを。当時、日本は、「内鮮一体」を唱え、朝鮮人の皇民化、すなわち、朝鮮人民を日本帝国主義に従属させるために、ありとあらゆる蛮行を行った。朝鮮語を禁止し、学校では、日本語で教えさせる、個人の名前を、朝鮮名に変えさせる、朝鮮の娘達を、従軍慰安婦にするために、強制連行する等々の中で、朝鮮人と、日本人との結婚が奨励されたのである。「内鮮結婚」といわれたものである。

日本人が、力で、強制的にその民族性を奪い去ろうとしたことが、朝鮮人にとっては、いかに屈辱的なことであったろう。差別を語る時、我々は、こうした歴史的事実を踏まえて、差別者としての自己を常に問い返す必要があると思う。

■雁のたより

「サンダカン八番娼館」「愛と鮮血」確かに受けとりました。自分のした事の大担さにおどろき、そして又、感激感謝の気持で一杯で、御本を胸にしばらく抱いておりました。さっそくに読んでからお手紙をと思いましたが、何分にも読む事も書く事からもずい分久しく、まごまごしてしまいとにかくお礼の言葉を早くと思いやっと筆をもちました。

本当に本当にありがとうございました。山崎さんのお話を伺いまして生まれてはじめて、他人（ごめんなさい）に本名を名のり他人の前で本名を書けた母国語を知らぬ朝鮮（韓国）の女です。そしてこのお礼の手紙も、本名を使ってはじめて出す手紙です。

本当にありがとうございました。

（東京都・朴　蓮寿）

日本ママのフィリッピン訪問

小塩れい

基督教女子青年会では、こと十五年来東南アジア留学生の為に、日本ママなるものを、組織している。私も今、フィリッピン一人、台湾二人の若い息子を持ち、母性愛を満足させている次第である。

その息子の一人、ホアン君が「お母さん、この冬、わたし、フィリッピンに帰ります。一しょにゆきましょう」とやさしいことをいってくれた。フィリッピンは前年訪問して、その家族達にも逢ったし、常夏の国、濃緑の椰子の葉ずれの音までが彷彿と浮んで、もう一度ゆきたい！とのおもいをかきたてられた。

「クリスマスがすまねば幼稚園園長の責任上私は行かれないの」というに、ホアン君はそれまでは待てぬという。で別れて行くことにして、私は十二月も押しつまったクリスマスイヴにあちらに着くように、エジプト機に乗り込んだ。

マニラで、家族全員の迎えを受け、ホアン君の義兄氏の車で、ケソン市とマニラ市の中間、マーボン・リザールの住宅街にあるホアン君の家に着いたのが二十四日の夜半十二時近く。玄関の横に直径一メートルはあろうというハイビスカスかの真赤な造花に、豆電球がチカチカするのに先ず一驚。ドアを開くとすぐリビングキッチン、セメント造の土間はピカピカに磨かれて、ヒンヤリとする感触が南国の家にふさわしい涼しさを呼ぶ。左右両方にしつらえられた階段、正面がてすり、右手から登ったところのドアをあけると、そこが私のために準備された室である。ベッド、スリッパ、ミシンまでが備えてある。「独りで占領して、いいんですか？」住宅事情の苦しい日本人私は、先ず恐縮、「いいの、いいの」ホアンは、何でもそういってくれる。せめて自分の使ったお皿くらいはと洗おうとすると、「いいの、いいの」室を掃こうとしても「いいの、いいの」敢えてしようとすると、「フィリッピンでは、お客様には、させないです」と一寸にらむまねをする。

フィリッピン語（タガログ語）は皆目通じない。併し、目と目、手と手、フィーリングで充分？コミニケーションが続いてゆくのは、不思議である。朝、ねまきにセーターを引っかけて、足音をしのばせ洗面にゆくのに、このママはもう起きて「マガンダン、クマガー（お早う）」。そして必ず「コピー？」と聞かれる、「ノーサンキュー」と言っても、スペイン語はお得意とある母君は、さっさとコーヒーをいれて、うっかりすると、ベッドにまで持って来て下さりそうな気配である。毎朝有難くお受けする。

メードインジャパンというカラーテレビの前で、家族は共に歌い、よく踊る。三歳の幼児までが手を振り、腰をくねらせて踊る。なるほど、南国の人たちは歌と踊りが好き、そして、上手。テレビでみるあのパッショネートなスペイン風の踊りの見事さ。

二十五日は、クリスマスなので、親類縁者の人々が、かわるがわるに挨拶に来られる。そしてちょっと御馳走を食べては帰られる。ひととおり終ったところで、今度はホアンのゴッドマザー（教母）の家を訪問する。この家には、八十何歳かの矍鑠たるおじいさまがいらっしゃる。孫か曾孫かが、ぞろぞろと、その親達に連れられて、クリスマスのお祝い言上に来ると、老人は、その労苦、勤労に固くなった掌をひろげ、この幼児おのおのに手をおいて、神の祝福を祈ってやる。何とも敬虔なその雰囲気、ああカトリックの国だなあ

と深い感動が胸をつきあげてくる。そういえば子供達は、朝起きたとき、外出から帰ったときかの、けじめ、けじめに、私の所に寄って来て、手を差し出す、単なるシェークハンドかと思うと、大人達が傍らから、「ブレッス、ブレッス」という。子供は、私の手を自分の額にあてて、祝福を祈ってくれというしぐさなのである。何と美しくも床しい習慣だろうか、「亀の甲より年の効」老人を敬う美風もさりながら、祝福を祈ってくれと、せがむ子供の愛らしさ、いじらしさ。カトリック精神が民衆の日常性にしみ込んでいるのには全く驚ろきである。人力車の轅を除って、オートバイをつけたようなトゥーリサイクルという車に乗ってみた。その正面に「ゴット・ブレッス・アス」と書いてあるバスの中にも、イエス様の像が下げてあった。

死人の復活を固く信じているこの国の人達は、決して死体を焼かない。等身よりもっと大きな石棺に安置して、地上に置く、三体四体と重ねてあるのもあったが、亡くなって永くなればその後の人を同じ石棺に葬ることもあるという。

地上に置くのは湿地の故か、アメリカニューオリンズもそうであったが——。十字架の他に美しい彫刻も飾ってあり、見事なこと、ドイツやスエーデンでみたあの花いっぱいの親しみあるお墓とは違い、大理石の人工美には、圧倒される思いである。

日本の礼儀と、フィリッピンのそれとは、やや違うのでは、と思うことがあった。ケソン市の町外れに小学校があった。由緒ありげなこの建物は、スペイン風な手の込んだ建物で誰かの記念のものらしい。裏が小高い丘になっているので、そこに登りようやくてっぺんまで辿りつき、遠くまで連りつゞく椰子の樹海に目を瞠りながら「ああ、しんど」。どっかり石の上に腰を据え脚を投げ出したら、突然、「お行儀よく坐って下さい。エチケットを守って」とホアン君のきびしい声……「誰もみてはいないのに」とみまわすと、いる、いる……彼方マンゴらの喬木に猿のように登って、こちらにじっと目を据えている腕白二人。ヤレ、ヤレ脚を投げ出すのは此の国では無作法なんだな、とはじめて知って、ちょっと鼻白む。そういえば先年タイ国へ行って、寺院の拝礼の場所に、「足を投げだしたりの不作法はしないこと」と書いてあったっけ、そうだったか——。因みにタイでは他人の頭に手をふれることはきつい御法度だった。可愛いゝ子供をなでてやりたくなる衝動を、何度抑えた事だったか。ホアン君から、もっと注意がとぶだろうと思っていると、きた、きた、道傍に咲いてるみなれぬピンクの花を、かがんでとろうとすると、「そんなこと、やめて、フィリッピンの人達、『あの人、へんな人』と思うから」とささやかれた。「何が食べたい?」食品がズラリ並んでいる店の前で「これ」とフランクフルトソーセージを指したら「やめて……フィリッピンでは食物にさわること、いちばんいけないこと!」いえさわりませんでしたよ。さわるといえば、すばらしい貝細工のシャンデリヤやネックレス、灰皿なんどの店で、あまりの見事さに、手にとって、しげしげ眺めようとしたら「さわらない!」と又一喝!、おおこわ!。

「してはならぬこと」それをすっかり判るまでは、そりゃ何年もかかるだろう。ホアン君、私を連れて歩くのには、よほど気を使っているらしい。日本ではかわいい息子が此処では逆転して、えらい小父さんになってしまった。

カメラを肩に、帽子をかぶって、フラリ。いい気分で外出しようとすると、「お母さん、帽子やめて。カメラ、手さげ袋へしまって、お金私あずかる、大事なものすべてお室に置いてきて下さい。」やっぱりここもあのミンダナオみたいな事が?と腑に落ちない顔をしていると、「お母さん、大きな声で、私にしゃべらないでね、日本人と判ると、悪い人寄ってくるといけない。お母さん、自分で買いものすると、吹っかけて高く言われるかもしれない」。やっぱり、ここも韓国に似てるのかしら、五六年前韓国へ旅したときも、きっと韓国の方が一人付き添ってくれたっけ、タクシーに乗るときも、散歩するときも。

ホアンの家の前の通りには、近所の子供達がいっぱい集って鬼ごっこや、こまをまわして遊んでいる。子供の世界はいずこも同じ、あまり楽しそうなので、職業柄つい私も輪の

中に入って、手を連ぐと、子供達は大喜び、キラキラ星の遊戯を教えたら、すぐ覚えて、飛んだり、はねたり、手を打ったり、私のところへ寄って来て、不思議そうに靴下をつまみ上げてみたりする。暑いので靴下は不用なのである。御近所の人達とも朝夕の挨拶を交わす。

「マガンダン・クマガ（お早よう）」、「マガンダン・ハポン（今日は）」、「マガンダン・カベ（おやすみ）」。「カムスタ？（いかゞ？）」「サラマ・ポ（ありがとう）」。これをいちばん沢山いった積りだったけれど、ときに「マサラ・ポ」なんていって大笑い、それも愛嬌とみなみな意気相通じて叔母ちゃん達、お姉ちゃん達、その子のマリエ（三歳）・マクマ（二歳）達と話をいっぱいしている積りである。のにのに、此の国一般の人達は、今私達日本人に対して何を考え、何を思っているのだろう。

コレヒドールという城塞跡へ行った。十畳位もあろうかと思われる窖に、八百人もの人を詰め込んで、空気と食物の欠乏によって死すと立て札には書いてあるが、まさしく日本兵が虐殺したにちがいない。そこここにある大きな井戸、これにも人を詰め込んで川の水を流し入れ溺死させたという。「トプリーズ・フォーアゴットン」と言ってくれたあの眉目秀麗なホアンの義兄の目を忘れない、あの瞬間を。こみ上げてくる泪のまま見上げた空には降るような星がいっぱいだった。この同じ構内に志士リサールの居室が、そのまま残されている。医者であった彼は、スペインからの独立を計り、こと露見して、銃殺の刑に処せられた。この居室に日本婦人の百号位の像が架っている。面長端麗なこの婦人の名はおせいさん。日本服をきちんと着ている。「恋人ですよ」百年近い前に、日本娘が？ひょっとすると山崎先生のあのサンダカンでは？果報者よといいたいけれど、リサール刑死後の運命や如何？この人の墓やある、とお墓、お墓とたずねたけれど、日本人の墓らしいものは遂に見当たらなかった——

一九七六、一、一〇

■燕のたより

太平洋を渡り飛んで東洋文化と全く異質な西欧社会に荷物を解いて座って居ますが、全く迷児のような気持です。どこにも文化的に定着出来ない放浪児になってしまいました。二世だけは当地文明に早く適応する様願って、子供達は当地高校に通学させていますが、こと十ケ月でまだ通話が不自由らしいです。

私と家内は生活費調達のために、牛乳・煙草・食料・雑貨の小さな店を引受け、朝九時から夜十一時まで目下年中無休です。当時ではスーパーとかデパートで買物するのが大部分ですが、そこでは休日や夜おそくまで営業しませんので私のような小店が維持できるわけです。……

生活の方便としての移住ですので、決して祖国は忘却できません。貧しくても荒廃しても母国は母国です。カナダ人にはなりきれない、なりたくもない心境です。もともと私は世界国家とか地球国家というビジョンを持ち、住みたいところ行きたいところへはどこでも行ける様な世界が欲しいのです。これが私ジプシー族の思考でありますので、私母国に対する嫌悪は全くありません。土地は狭い、資源は欠けて居て人口密度は最大なあの所で食物を探して走りかけていなければならない生活をするより、一人でも沢山海外へ移住してお互に活きる方便として、私決断して当地に来ました。

カナダ政府の移民統制が益々厳しくなり、韓国にて多くの願望者が許可がならないので失望しています。今のところ移住して良かったとか悪かったとか判断は早いですが、どうせあの狭い国では活きられないのですから、一人でも多く広い海外へと開拓に出駆けなければならないのです。近頃は郷愁心で友達が恋しいとか故郷が懐しいとか考えていますが、もっと年がつもればそうでもないでしょう。

当地にも相当の日本人が住んで居る様ですが、彼らは全く社会に解け込んでいますので、そう露出して見えないです。韓国人僑胞は勿論沢山住んでいます。近年移住して来て皆生活基盤の確立のため昼夜奔走中であるようです。

今店の閑中でこの手紙を書いていますので静かに考えをお伝えすることができず残念です。（カナダ・トロントにて　朱　洪吉）

私のアジア女性交流史（第五回）

タイで山崎さんの著作をテキストに使う

インタラタイ・かつ代

タイに住むようになって半年目に、チュラロンコン大学の日本語教師の職を得た。ちょうど一人空きができたところを偶然のことから私が採用され、非常勤講師として週八時間担当することになった。

チュラロンコン大学というのはその名の示すとおり、ラーマ五世、チュラロンコン王によって建てられたもので、この国最高の大学である。特に文学部というのは、この大学の中でも最も格式の高い学部ということになっている。そこで教鞭を執ることになったのだから大いに緊張した。

学期の始まる二週間前に担当の科目が決まり、私は四年生の「新聞」を週二時間、三年生の「日本語講読」を週三時間、二年生の「会話」を同じく週三時間教えることになった。新米の教師に三科目は辛かった。しかも三科目とも特定の教科書がなく、教科書選びから始めなければならなかった。結局二年生の会話は毎週トピックスを決めて自由に話させることにし、四年生の新聞は日本から朝日新聞を一日分、学生の数だけ取りよせて読むことにした。いちばん最後までテキストが決まらなかったのが三年生の講読で、あまたある読み物の中から何を選ぶか、全く頭を痛めた。前の学期には、芥川の「くもの糸」や「朴子春」、また鷗外の「高瀬舟」などを読んだということだった。私はどうも文学を読ませることにはためらいがあった。日本語講読というとすぐ文学とくるのが一般的傾向のようだが、文学偏重には少々うんざりしていたので、学生に文学書を与える気がなかなかしなかった。日本人ですら戦後生まれの者には明治の鷗外は遠かった。私は学生たちに、現在生きている日本人の姿を知らせたかったので、何か現在日本で読まれているもの、それもエッセイがいいと思った。この瞬間にはまだ山崎朋子著、「火種はみずからの胸底に」は思いいたらなかったのだが、いろいろな条件を考えていくうちに――たとえば、学生は全員女子学生だったので、何か女性問題に関係したもの、日本語として美くしいもの、日本で評判のよかったもの――自然と「火種……」の存在に思いいたった。この本は山崎さんがわざわざ日本から送って下さったもので、私も非常に興味を持って読んだのだった。「火種……」をテキストとして使うことを思いついてみると、これは全くうってつけだと思わずにいられなかった。幾つかのエッセイの中には、日本の女子学生の生態を描いたものもあれば、東南アジアの女性のことに触れたのもあり、また山崎さんの全作品を通してのテーマである底辺女性の問題も、さらにアジアとの交流のことも、このエッセイ集には納められている。急に自分がアジア女性交流史研究会の一員であるという自覚が鮮明に浮かび上がってきた。タイの大学で教鞭をとるという、私に与えられたこの機会に、山崎朋子という一日本女性が、日本のかつてのアジア侵略にざん悔し、それを踏まえた上でなおかつアジアの女性たちとの連帯を叫んでいるその声を伝えたいと思った。

授業ではこのエッセイ集の中から〝省みて日本女性を思う〟と〝女性解放ということ―女子学生にかける期待と不安〟の二つをとりあえず読むことにし、学生の数だけゼロックス・コピーして教材とした。

私が山崎さんの著作をタイの学生、しかもエリート中のエリートの女子学生たちに読んでもらいたかった理由のひとつには、山崎さ

んの底辺の視座に立つ歴史観を把握してほしかったということがある。タイのエリート女性にタイの底辺女性のことを考えてもらいたかったのである。日本に居た時、私は日本の底辺の人々については、正直あまり考えたことがなかった。国民の大多数が中産階級に属するようになった日本では、底辺の人たちと接触する機会は限られていて、私も自分のまわりにそういう人たちの存在を目にすることがほとんどなかった。ところがタイに来てからは、私は毎日底辺の人たちを間近に見て暮らしているのである。きれいなチュラロンコン大学のキャンパスとそこで学ぶ学生たち、一方スラムに群がる莫大な人口、この二つのギャップを見るにつけ、私の学生たちには是非タイ社会の持つこの深刻な悩みを考える人になってほしいと思った。もち論「日本語講読」の目的は日本語の文章を読めるようになることにあるのだが、言葉の裏にある思想を伝えることも授業の目的であっていいはずである。ただしこの国ではまだ、マルクスやレーニンの名前が出てくるものや、階級闘争という言葉が頻繁に使われる読み物ははばかられたので、授業では前述の二つのエッセイを読むことにしたが、山崎さんの思想全般については折に触れ学生たちに説明することにした。

第一時間目の授業で、私はまず「山崎朋子、火種はみずからの胸底に」と書いて、ふりがなをつけた。それから女性史研究家、特に底辺女性史、と続けて、作者の略歴紹介から始めた。十一人の女子学生の反応は、第一時間目に於てはあまりはっきりしたものではなかった。多分、ゆっくり話したにもかかわらず私の日本語に慣れていなかった学生たちには充分聞き取ることが出来なかったためだろう。しかし、日がたつにつれて、彼女たちがなみなみならぬ関心を寄せてきていることが私にも伝わってきた。特に「女性解放ー女子学生にかける期待と不安」は、日本の同じ年頃の女子大生の生活と人生観を彼女ら自身との比較において的確にとらえているようだった。このエッセイは、大学の卒業証書を嫁入り道具のひとつと考えて大学に通っている日本の女子学生たちの主体性のない生き方を批判的に書いたものだった。日本の女たちがどんな問題をかかえ、どんな問題で悩んでいるかということがはっきり出ていて、そこにはタイの女子学生が共感できる部分もあったし、同情したり、またはもっとしっかりしろと叱咤激励するところもあった。

彼女たちの反応をはっきり知りたいと思ったので、このエッセイを読んだ感想を学期の終わりに書いてもらった。四百字づめの原稿用紙に日本語で二枚程度のものを提出してもらったが、この感想文からタイの女子学生たちが、日本女性の置かれている立場に非常な同情を示しながらも、その主体性のない生き方にはきわめて批判的であることが明きらかであった。彼女たちの作文の内容を簡単に紹介すると次のようなものである。

「大学に行って学問をする目的のひとつは自発的な意見や問題意識を持つことにあると思います。日本の女性の大半は大学を出ても家事、育児を天職として生涯を過ごします。どうしてもっと自分を生かすことを考えないのでしょうか。家事と育児だけが女の人生でしょうか。」「日本では憲法で男女平等が謳われています。だけど実際には男と女は平等の権利を持っていないようです。タイの女性の方が自由です」「日本女性はタイの女性の何倍も勉学の機会があり、多くの女性が大学まで行っているのに結婚すると家事と育児に専念してしまうのは残念です。私は学歴は社会のために使いたいと思います」「タイでは日本より女性が尊敬されています。日本の男性はいつも女性に命令するようですが、日本の女性が自分の意見と自信を持っていないので男性に頼らなければならないからでしょう。タイの女性はもっと自立しています。」「タイでは所得が低いので、結婚してからも女性が外で働らかなければなりません。日本は経済的に豊かなので、日本の主婦は働らかなくてもいいのかもしれませんね。でも勉強したことを使わないのは残念です。」

ある日の授業で一人の学生が手を上げて質問した。「山崎朋子さんに手紙を出したいんですけど、住所を教えて下さい」と。そこで私は黒板に住所を書き、さらに来年の五月頃著者がタイを訪れるかもしれない旨を学生に

話した。事実、山崎さんは二度目のタイへの旅を最も暑い時期に計画しておられた。このニュースを聞いた学生たちは口々に「もし山崎朋子がタイへ来たら、先生、チュラロンコンへ連れてきて下さい」と言うのだった。

果して山崎さんが私の学生たちと体面する日が来るかどうか、それは何とも言えなかった。ただ学生たちに山崎さんの旅行の計画を話してしまったので、なんとか実現してほしいものだと願っていた。

幸いこの計画は現実のはこびとなり、山崎さんは二度目のタイ旅行で私の学生たちとの話し合いの機会を設けて下さった。

学生たちの喜こびはひとしおだったにちがいない。自分たちの読んだテキストの著者がはるばる日本からやって来て、しかも「火種……」を一冊ずつプレゼントされたのだから。

話し合いは一時間しか時間が取れなかったが、学生たちは日本の女性問題について次々と質問を出した。最後になって山崎さんが、その前日見学に行かれたバンコクのスラムの様子に触れられ、学生たちにも是非行って見て、この問題を考えてほしいという意味のことを言われた。スラムの問題というのは、エリートの責任として解決されなければならないと思うが、チュラロンコン大学に学ぶあなたたちも責任を持って考える必要があるのではないか、と言われたのに対して、一人の学生がはっきり「そう思います」と答え、さらに数人の学生がうなずいた。

これは小さなことと言えば小さなことかもしれないが、私には印象的だった。少数の特権階級と底辺の大衆との間の溝はうずめられることなしに長い間見はなされてきたタイでは、大学教師が学生たちにスラムの問題に取り組めとはついぞ言ったことがなかったのである。身分社会の壁は厚く、エリートたちは底辺の人々を省みることなく、彼らの生活を謳歌していたのだった。

しかし一九七三年の十月革命以後、事情は一変し、学生の中からも進んで農村に入ってゆく者や、スラムの子どもたちに字を教える者が現われたりしている。やっと底辺の問題を真剣に考える人たちが出はじめてきている時だった。だから、山崎さんのおっしゃった事は、これからのタイ社会の方向性と一致した啓蒙的な言葉だったのである。エリート女子学生たちが山崎さんの言葉に深くうなずき共感の意を示してくれたことに私は大いに満足した。

アジア諸国間の交流の問題を考えると、今まで私たちは非常に不幸な歴史を持ってきたことに気がつく。日本は近代化にのり出して以来、手本をすべて欧米に求め、アジアをべつ視してきたわけだが、これは日本の側だけにとどまらない。タイもまた欧米を師としてその近代化を達成しようと試み、その過程に於ては当然のこととして他のアジア諸国を無視し、切り捨ててきたのだった。だが時代は変わった。これからはアジアはアジアからもっと学ぶ必要があるだろう。タイの学生が山崎さんの著作から何かを学んだように、私たちもタイ人から学ぶべきことは多々ある。お互いに学び合うという姿勢でこれからの交流が深められてゆくことを希望して止まない。

■燕のたより

ご活躍をここヒマラヤのふもとよりいつもお祈りしております。先日「文芸春秋」にお書きの文章、拝見いたしました。

私も、"Cottage Aorora"というささやかな民宿を開いてから一年近く、ネパールに来てから四年近くになりつつありますが、雨期に入り、お客様皆無で、本を読んだり勉強したりする時間が持てるようになりました。アフガンへ旅に出る予定です。体調をくずしており、ちょっと周囲が反対しておりますが。

貧しい小さな山国で、重だった産業もない王国ですから生きることは厳しいですが、素朴で、空のようにすみきった青さの農民たちの心にふれるとき、やはりここはよい国だと思うのです。日本からの観光客も年々ふえていますが、観光客がふえることイコール人々の心が失われていくことは悲しいことです。

アジア女性交流史の研究が確実な歩みをされることを心より祈りつつ。お体をお大切におはげみ下さい。

（ネパール・カトマンズ　黎子・バイジャ）

アジア伝道者の妻として　その五

梅森幾美

熱帯産業の支配人奥田直常氏は信州須坂の殿様の御次男で、学習院から東大出身という家柄であって、奥さんは岡山市長を長く務めた守屋氏の妹さんで、日本女子大出身のインテリ婦人であった。

前任田子氏の後をうけて支配人となられたのだが、育ちといい学歴といい、上流階級を通って来た人らしい誇りと自負とを身につけて居た。須坂の殿様といっても大正のはじめ頃になると世間ではあまり重視はしていなくなったし、小さい藩であったから貧困でもあって、今栄えている何々といふ法律家の昔の御家来に学資等の援助をうけても居たのだが、郷里に入れば常様常様と地付きの人々には重んぜられ、家人等には三指ついて出入の礼をうけると云ふならわしにつつまれるのであった。

この人が、梅森が巡回伝道に行くようになってから、身についた礼をもって迎へられたが、心ではなかなか信ずる経過はすすまなかったが、訪ねる度に夜ふける迄の熱心な話のやりとり、ついに信仰告白するに至った。市に出た時には必ず教会に出席し礼拝を守る様になった。「私はこうして出席して御話しをきいたりお祈りをしたりする時、先ず思ふ事は、今自分の隣に座っている人は何者だろうか、罪深い者だといふ祈りをきく時、どんな罪をおかした人なのかも知れない人と座を共にしていてもよいものなのか」と思ふのでした。だんだん神様の事が解るにつれてだれより罪の深いものはこの自分であり、誰より低い自分だと云ふ事をさとりました――といって証しをした事がありました。

熱帯産業とは、三井系のゴム園で、他の職員等も素養学歴共に上層の人々でしたから、奥田さんが入信と同時にそれ迄より一層集会は祝福され、受洗者もつづきました。自然、家庭生活についても、御手伝する面がふえて来ました。ゴム園の入口、船付場のそばに雑貨等扱って国の御用を承ける星見商店は、更にたくさん渡南し、四人の子女は皆シンガポール市内のカトリック英学校に通っている優秀な子達でしたが、カトリックのきびしい寮生活でしたから、言葉がすべて英語で親子の話し合ひが出来ないのがなやみだったのです。奥田さんのすすめで、梅森の家庭に預かり日本語をおぼえる工夫をしたのが手はじめで、園内の子女がふえて来たので園内で教育が出来る様にと、先生を内地から来ていただく事の御世話をしました。

ある時は、赤ちゃんが生れてお母さんが大病で途方にくれているのを見すごしに出来ず、家につれて来て私の乳をのませ半年間育てたことがありました。その時は三男襄が出生間のない時で、双児の後でしたからでしょうか。大きなおとなしい子でしたし、母乳があまって仕かたがない程でしたので、再び双児を育てる思いで喜んでお手伝いする事が出来ました。ミドリちゃんといふ女の子でした。心にいつも残って居りますが、どうしていますか。

洋服を生活に取入れる可きだとの考へは最初からもっておりましたので、帰朝した折、個人教授でおぼえた洋裁技術を、おくめんもなく、のぞまれれば教へはじめ、ゴム園の職員の夫人等のために出張講習して大変喜ばれました。世はかわり人はうつり代り数年たった頃でも、支配人は三十年近く変られる事なくつづきましたので、教会は奥田様をおし、教会長老の役を引きうけていただく事になり、しっかりとした土台が出来て大層よい証しを

たてられました。そうですけど、とてもじみで何ごともひかへ目、ことに教会では、ぜいたくをつつしまねばならぬとて、相変らず、ランプや炭・薪の生活はつづけて居りました。後に園内で市中に出られる事がしばしばでしたので、其都度ホテル住ひよりもとて教会の一室をお貸しし、食事も子供の多勢な家の食卓に御一緒に座って下さる様になりました。公務の必要から電話がひかれ、おかげ様で教会もこれに便乗しました。戦後病気で、まなづるの自宅で若い人等をはげまし、交り、皆幸せでした。しずかに亡くなられましたが、富士見町教会で葬儀を営みました。夫人は数年後、脳出血で急死されました。

ゴム園では、親しくなればなる程家庭同志の協力が要求されます。結婚の御世話は第一でしたが、そのうち御子さんが出来、出産の為の病院の紹介からそれ迄の産婦の預り役、新生児の産湯の事、三週間の産後の看病、学校になると家にあずかって寄宿舎の役をし、ショッピングの案内、出張による洋裁の指導、型紙搬布は遠隔の地方等に、すべて梅森が巡回伝導によって負わされた私の仕事でした。

教会騒動記

アドイス路の一軒家を見つけて来たのは、南洋倉庫の社員井上さんでした。信仰告白までにいたっていなかったが、有望な存在であった。ソートの邸の近所で、プールのそばの屋敷町にある社宅から通勤のみぎり、ふと目についたあばら屋を教会にしたらと考へての事であった。家主は小さな私道のつき当りに豪壮な邸宅をかまえ十人の夫人にかしづかれているという人で、トンセンという華僑の大富豪の持家である事も解ったし、お化屋敷などと近所で噂する程長く置いていて、荒れ放題になっていた建物である。適当ではないかと相談がまとまり、交渉に及んだ。あばら屋といっても庭が三百坪程もあり、椰子の木二本、バナナの樹も一かたまり植っているし、マンゴー、アモタン等と果物があちこちにあると云ふ一軒家だから、教会としては此上ないかっこうな家だった。その上、家賃は特に安くして八十弗でよいといふ。今の家も町中の長屋だが八十弗払って居たのだから、この点も良し、さっそく借る事に一決、それにしても此れを人の住む家とするには手を入れねばなりません。建物はサボカボすればよい、床は水洗いですればよい、ベランダのロタン造のスダレは青白のペンキ塗りにする、会堂には椅子を増さねばならぬ。裏の小屋の教室は、手を入れれば誰かに貸す事が出来る。そうすれば維持費もたすかる等見つもりをしてみるものの、それの費用のための貯えはない。そこで、それ等の費用をうるために募金活動の案が婦人会から出た。協力出来るならそれもよかろうといふ事になって、実行する事になる。そう目先に希望が見えてくると、ひっこみ勝ちの人等も名のりをあげて協力に加って下さる。教会バザーは、手製ちらしずし、サンドイッチ、特製ビーナッツ紅茶を食堂で、アチャ漬のビンづめ、アラッパキャンデー等を店々で、手製のクッションや物入れのための壁掛、姉様、お手玉等、教会の中は一ぱいにかざられた。何しろこの様な催しは居留民団としてははじめてだったので、総領事はじめ各会社の重役社員方、町の方々も集まり、大盛会で、一同疲れる事を知らずにはたらきました。それでも整備の教会費用には不足でした。次に基金の方法として、邦楽演奏会をYMCAのホールを借りて日本人キリスト教会のためとうたって、外人間を目指して宣伝――ホール一杯の入場者を得ました。琴、尺八、三味線独奏やら合奏やら、外地の事ですから出来る人にはかぎりがあります。それでもめずらしいので、一応は好評をはくし、これも成功でありました。こうして信者、来信者交って協力して、一同よい気もちになって親しさも増して来ました。

そうしている間に、この様に成功したのは自分が智恵をしぼったからだ、昔の経験を生かしたからだ、家庭を無理して手伝ったからだ等と、誇りが高ぶりに変り、ひいては教会の伝道の仕方、牧師の説教の仕方にまで意見を通そうとする空気がはびこって来て、自然と牧師への、恩を感じない横暴な者よとの批評とかわって来ました。感謝は感謝、信仰は信仰と、ゆずらない梅森への深いもつれにたちいたったのでした。これが、休養のため帰朝中、代って来て下さった常葉さんの来た直

後だったので、その空気のまっただ中で、ついに私も独断で引揚の決心にいたらしめる原因となってしまったのでした。決して特定の人を不用意に活動させるのは、わざわいのもとであると梅森は申してをりました。人間のあさましさ、良い事はすべて高慢になり、事はつつしまねばなりません。ふがいない事と思います。

第二の騒動記、江尻さんの不心得

梅森が帰朝した時つれて来た、内地で身のふり方に手をやいていたみな子さんをめぐって、恋愛問題が私等の目の前でもちあがり、御世話ずきでたのまれれば善悪の見さかへなく助力する江尻若夫婦が、家族同様私の家から出てしまったみな子さん等をかくまったり、智恵づけたり、不愉快な成行をかもしだした事がありました。誰か適当な方があればとの考へのもとに同道した梅森の事ですから、江尻さんならずとも、そうとしったら同意こそすれ異議のあろうはずもない心の内もしらないで、後見者を無視してまで親切をふりまわす不心得なあり方は、しばしば人々の間に問題をまきおこす事になるのでした。当の相手が三井物産の社員であったので、事を正常にもどして、あらためて梅森の手によって挙式いたしましたが、残念ながら心はとけ合わぬじまいになってしまいました。せまい邦人社会で、この様な事件がおこると、パアッと噂がひろがって取さたさまざま、言いわけをしない牧師をめぐって暗雲はほんとうに不愉快なものでした。

騒動記 ― 浅香節子の事

昭和二年七月、献が七つの時、梅森は魂の糧を頂き度て帰しました。此度は献がお供をします。此度は、井上正子と云ふ狂った婦人を護衛しながら行かなければならなかったのも、自然のなりゆきでありました。時の船長が親戚の者であって、特別の便宜を計らってもらい、船員の一室をあてがわれ、おかげ様で無事親元に送りとどける事が出来たのですが――。

此婦人はキリスト信者で、先に来て居た夫君の呼寄で渡南し、ひと先づサクラホテルに宿泊しました。船中印度人一家と同道したので食事はカレー料理が多く、なれぬ食生活にあてられてひどい便秘に苦しみ、また熱帯での便秘は発熱の大きな原因になります。サクラホテルの主人は世話ずきの親切な人で、此婦人のためにサツマ芋入りの粥をせっせと食べさせてくれました。けれど、不眠と便秘でとうとう発熱してしまいました。口ばしることによると、信者だという事がわかったので、近所の梅森牧師に何とかしてほしいとの事で、家に引きとる事になりました。

丁度これといって用事のない中年の小母さんをたのみ、身のふり方がつく迄おもりをしてもらいました。小母さんは、夜中ふらふらと大路に出て歩くので、ひもで自分の体に結びつけて寝るようにしていました。礼拝の最中ふらふらと歩き出し、「お兄様」などと呼びかけたり、着たまま水道口の下に坐ってジャブジャブ水浴びなどもしたり、地方から迎えに来て途方にくれて居る夫には、「あなたは何も心配せずに御活きなさい。神様にお祈りしてあげますからね」と、いきなり坐って大声で御祈りをはじめる等、いじらしい姿ですけど、何とかせねばならなく思ひましたので、こうして日本へ送り届けることになった次第。

日本キリスト教会の大会に出席したり、主な修養の時を終って、献をつれてシンガポールへと帰路につきました。その時、姉の二葉保育園で恋愛事件を引おこして、その始末に困って居たのが、節子さんでした。気をかへる事が良かろうとて、梅森が同道して来たのです。結婚の道もいくらでもある、音楽も出来るし、保姆の経験がある等、シンガポールなら生きる道はあると心にうかべながらつれて来たのでした。

教会にはいつにもまして青年等が多く出席して居りましたので、讃美歌グループが生れ、ハモニカも盛んになりました。日曜学校も手伝ってもらう事になりました。SSに来る幼児を主に幼稚園を開く事になりました。その頃は、私は子供も増し、用事も多いので、日本人小学校も辞任して、神山先生でした。こん度教会で幼稚園がはじまるといふと、十人余りの希望者が集りました。庭はあり、室は

手ごろな物がある、楽器もある、そこへ音にきこえた二葉保育園での経験者が保母さんだといふので、かんげいされたのも無理もない。一人で足りない時は、私も手伝うと心がまえはある、すべて好都合でと、はじめる事になりました。

クレヨン折紙等さし当り必要な道具は、英学校の学用品を扱う店から買う事が出来る、その頃は石ばんと石筆が主に使はれていたので、それもそろへました。さすがに幼児教育のベテランであると、私はじめ感心しました。一方、安藤ドクトルは、当地医学校出身の二世で、其奥さんはブール女学校出の教会生活もした事のある、私も前から親しく交って居たのでしたが、此一家と親しくなった節子さんが、梅森の家庭生活が何かと身につかず、カレーが食べられぬ、お皿とスプーンのこすれる音がやりきれぬ、等気おきなく話している内、梅森牧師のあり方等にはずれてゆき、時には食事によばれて行ったり、宿をかへたら等と迄、同情が行きすぎになってゆく様になった。何となく不調を訴へて居た彼女は、ドクトルに診察をうける事になった。思いがけもなく妊娠しているといふ。事が解って、本人はおどろきながらも来星以前の生活について打ちあけるようになった。それでこそ、カレーが食べられぬ、お皿の音が気になる、やかましい牧師家庭のそくばくには耐へられぬ等々であったのであろう。

それにしても、世の人は、弱い立場を打ちあけられると、正しい事をおおいかくして同情へと運んでしまうものである。普通なら、ドクトルとしても、保護者ともいふべき私等に相談して適当な処置を取るべきであったろう。しかし梅森には内うちで、中絶の方法をとって、そしらぬ顔をしてしまったのであった。何となく後めたい感情が、私等からはなれてゆくのがわかって来た。才能のある若い人への魅力と同情がだんだんつのって、とうとう幼稚園の閉鎖、送別会等も私等のしらぬ間に取りおこなわれ、突然最近のOSKの船で帰るといふ申出で、おどろかされました。

私等も不愉快でなりませんでしたが、考へると、只ひたむきに良心にはじない様にとの願ひのみで、人情のむずかしさをしらなかった自分等のいたらなさをはずかしく思ひますが、悪いけれど腹が立つばかりでした。そうして逃げていった本人は、そうして迄も又私の姉がやっている二葉保育園に泣きついて行きました。

当地でその様な事のあった後の感情を調整する事は、本当に重荷を負ふ事になります。どの一人一人も皆よい人なのに、ひとつまちがふと、とんでもない足あとを残してしまふものです。

梅森休養のための帰朝と常葉隆興氏

大正十一年、梅森は、在南期間も大分長くなったので、心身の疲労も目に見えて来た様に見えました。東京で常に心配して居て下さった植村先生のお配慮で、しばらく帰朝、休養を取計らって下さった。其の年の三月神学社を卒業の常葉隆興さんが、伝道実習の意味で留守中の責任を負はされて、梅森出立前に到着された。若いはぎれの良い青年牧師を迎へた教会員はじめあたりの人等も、大歓迎の様でありました。梅森も安心して、長男按三歳半をつれて日本帰りの途につきました。神戸につくのが四月二十九日だといへば、七年前の記憶でしたので、いつもの衣類よりも厚地で子供の仕度をしてやりましたが、神戸に着いた時は昔の考へていた事はどんでもない錯覚で、とても寒くて上陸出来なかったのでしたが、神戸に住んで居られた米くぼさんと藤沢さんが、いそぎ家から御子たちの一揃へをもって来て下さり、ふるえる親子を風呂屋につれて行かれ暖めて下さったので、一息がつけた事を忘れられぬ、若き母としての失敗談です。米くぼさんは、船員仲間の労働運動の闘士でしたので、米くぼさんの恩人だといって同志の人たちから歓迎されて、大いに気を良くいたしました。一路東京に向い、二葉保育園に私の姉徳永恕をたよって参りました。

はじめて会ふ遠来の小さい客を、どなたからも喜んで頂き、まもなくすっかりなつき、ババのあちこちへの挨拶、外出、会合出席等、保育園児の中に交っておとなしく留守番をしています。保母さん等はもちろんですが、恕おばちゃんの可愛がりぶりは、はたの目にもうれしい程でした。私の実家にはおばあちゃ

んが健在でしたし、私の兄夫妻も居て、そこにもつれていってもらったり、お兄さん等から豊島園等にもつれて行ってもらったり、はじめての経験を満喫して居た。時には岩手の郷里におばあちゃんを訪ねたが、そのとき家の傍を通る汽車に興味をもって、独りで線路に出て線路に耳をおしあて、遠くにひびく汽車の音にきき入って居たのを、近づいて来た汽車の運転手が気付いてあわやというところを停車。危ういところをまぬがれた事もあったとか。何も知らずに久方ぶりの挨拶を交していた家の者は、大しかられにしかられた等、按にとっては、見るものきくもの珍しくおもしろかった様でした。パパは安心して托して、これ又、久々にかさかさに枯れた様な魂の粋を吸収に取りくんで居るのでした。

梅森帰朝中、私は、常葉さんに期待しながらも責任感にもえて居りました。小学校には務めながら、年の小さい恵子と献をまもりながら、大人の集会や訪問は任せても、日曜学校は私が主になってはげみました。すこし梅森と意見が行ちがってこまる事もあったので、解放された様な気分になって、働きやすいとさえ考えて居ました。二ケ月程も立つうちに、教会員間にも梅森牧師に圧迫を感じていた空気がふくれあがり、常葉先生に無遠慮に訴えはじめました。外部の人々も、梅森へのかげ口はなかなかうがったものもある様な事がさかんになって、新しい常葉氏の耳に入ってきます。一歩家を出ると、梅森のうわさが悪口に発展し、吸収がつかないと彼をしていわしめる程でした。ついに常葉さんが、「奥さんと力を協せて行く事に異存はないが、それが梅森夫人だと思ふと、とても自分にはどうしてよいかわからない」と申します。私としてもその辺の空気に負けたと云ふのでしょうか、すべてもっともな言分と思ひ、思ひきって此際はすべてから去る事が聖旨ではないかと考へ、帰朝中の梅森に相談もなく、双児をつれて引あげの覚悟で帰朝いたしました。

薄はかな人知にたより計り見る事は大まちがいに気がつくのには、おそすぎました。私も疲れきっていたのでしょう。一年半の双児をつれての船路二十日間、それはおそろしいとさえ思ふ大しけに会ったり、行とどかぬ便の後しまつ等、せめられながら、二児を太いひもでしばってつかまえながら、とうとう船中ではしかに感染して、神戸についた時のみじめな姿、それでもなんとか無事に東京の二葉保育園にたどりつきました。

二人の子はそろって高熱で、重態に見えました。恕小母の室を二つぶんどり、ふとんを敷きつめて医者よ氷よと二日もたつと按に感染して、三人の病児の中で、無断帰国についても挨拶が気にかかり落ちつきません。一人をねんねこでくるんで植村先生にお目にかかりに行きました。いちぶしじゅうを報告し、こうまで不信感をもたれているのでは、伝道どころか聖名をけがすことにもなると思ひますから、思ひきって引下るべきと思ひます――と申しました。黙って聞いていらした先生は、やがておもむろに、「奥さん、梅森さんは親切ですか」とおっしゃる。「ハイ親切すぎていやがられます」と私、「それでいいです、安心していらっしゃい」とだけの愛と権威に充ちた先生の御言葉、あれ程つよく決心して来た私は、何の返す言葉もありません。「あなたも疲れているから、しばらく休養してお帰りなさい」と。

そして再び新しい決心をもって帰ったのですが、半年程の留守中、常葉さんは色々な事にぶつかって、つまづきをたくさんのこしていたたまらなくなって、ジャバをまわって帰路に着いたといふ話を人々から聞いたのは、後に帰った梅森の耳に入った事でした。人の世のなさけなさを、しみじみ感じます。人々も、あらためて梅森牧師を見なおした様でした。

金一勉著

『天皇の軍隊と朝鮮人慰安婦』

日本軍慰安婦の八～九割が朝鮮娘であった。その現実をえぐることで、天皇の軍隊の本質を突く。民族の慟哭を伝える一冊です。

（三一書房刊・一五〇〇円）

ユーカラの記録を紹介する

葛野さんの仕事

山崎朋子

岡本さんと知り合って、もう四・五年になる。ある学習会の帰りに声をかけて下さったのだが、単なる偶然と思っていたこの出会いも、岡本さんの方からすれば、決してそのようなことではなかったようである。

彼女は、わたしの書いたものすべてに目を通し、そのなかにアイヌ人にたいする視点が無いことに気づかれ、わたしに新しい勉強をさせようとして近づいて来られたのである。

はるばる北海道日高の地から、この葛野さんの原稿を抱えてきて下さったのもそのひとつである。病床で書かれたという原稿を拝見して、わたしは驚かずにはいられなかった。それは、わたしがこれまでに見たユーカラは、和人の金田一京助のものであるにせよ、アイヌ人の知里真志帆のものであるにせよ、学者の手になるユーカラのみであったからだ。文字を持たない言語として世界でも稀有の言語――アイヌ語を、ともかく文字としてこの世に残す至難な仕事は、専門の言語学者にしか不可能なことであると、一般に言われもし、わたし自身も信じていたのだ。

しかし、葛野さんは言語学者でもなく、また学校の門など一日もくぐったことのない方である。その人が、なんとしてでもユーカラを記録にとどめたいとの一念で書かれたのが、この原稿である。葛野さんは、そのために和語を自習され、従来学者によってローマ字で表記されていたアイヌ語を、片仮名で記された。

葛野さんの記録されたユーカラが、学者によってどのような評価を受けるのか、わたしは知らない。けれども、この葛野さんのユーカラの記録こそは、アイヌ庶民の手になるおそらく最初の記録ではないだろうか。

この葛野さんの営みの価値を考えるとき、原稿をわたしのためだけの学習テキストとしておくのは、申しわけなく思うようになった。これが、葛野さんの採集・記録・訳によるアイヌ・ユーカラを皆さんの前にお届けする理由である。

熱い思いと長い歳月をかけて原稿を作ってくださった葛野さんに、心からお礼申し上げる。また、葛野さんとわたしのあいだに橋を架けて下さり、原稿の清書や校正などすすんで手伝って下さった岡本さんにも感謝したい。そして、本誌創刊以来はじめての横組みで、未見の言葉――アイヌ語を一字一字タイプに打って下さった女性タイピストの方にも御苦労様でしたと申したい。

葛野さんの記録はこれからも連載して行きたいと思っているけれど、療養中の葛野さん、どうか、ささやかなりともこれに力を得て、ますます豊かなお仕事をつづけられますように。葛野さんの仕事を支えていらっしゃる御家族の皆さん、今後ともよろしくお願い申しあげます。

葛野辰次郎さんのこと

岡本頼子

葛野辰次郎さんのことを知ってるようで、いざ紹介するとなると、まったくわからないことの方が多い。ただわたしの知ってるおじさんは、わたしの叔母さんと結婚されて十人のお子さんに恵まれたにもかかわらず、四人のお子を亡くされたこと、現在は一男、五女がおられて四人の娘達が、それぞれの他市村に嫁ぎ、十一人のお孫さんがおられること、働き盛りの五十代に胸の病魔におかされて入院生活を余儀なくされたこと、何よりも古式豊かな格式を重じ大切にされてること、昔の古老の語り口そのまま受け継ぐ、自然とともに生きたい、なにごとにも興味を持ち分解してわかりやすく話してくれる方といえます。

当年六十六歳になられる、おじさんが話してくれたところによると、昔自分のおばあさんから聞いた物語りを話してくれましたが、若いわたし達には和語を母語として教育されてるので百パーセントと理解できることはないにしても流暢なアイヌ語で、語りかけられるとついうれしくなって何度もおねだりしてお話しをして、いただきますが、いまの北海道ではちょっとした、アイヌブームを引きおこすきっかけになった、アイヌ人の手による書物は一つのアイヌの灯びとなって明るい話題を提供してくれてまったくわたしなど一面識のない方のことでもうれしく思っているのです。

和語をアイヌ語にする作業は訳語を専業とする方も同じかと思われますが、意味とか、価値がまったく異なる場合が多い。わたしもその一人なのだが、それをこともなげにやってのけたおじは、その記録ノートはほとんど入院中のベットの上でなさったとゆう。六年間にも及んだといわれた筆記は、ご自身で大切に保管されてた一冊のノートをおあづかりして発表させていただくわけだが、おじは躊躇されたが、一人息子と叔母が強く進めてくださってのことです。

働き盛りを病気がちで病院暮しでは、農業をしているご家庭ですので、叔母の理解度がほしかったのでしょうか。

十二歳のとき他家へ奉公に出されて、学校教育もまんぞくに受けなかった、へだたりをみごと乗り超えられたのも努力もさることながら、家族の大きい愛にささえられてのこと、家族の口添えがほしかったおじの心境を推察できるものですが、病弱のためか、神経質なところもあるけれど、でも元来の明るく話し好きは、かわることはない。

記憶の糸をさぐる作業で、張り合いがあったのか入院生活も有意義であったと思う。三～四年前に退院なされて現在自宅療養中です。

「交流史」への発表にご配慮くださった、上氏、山崎氏に心よりお礼申しあげますとのことでした、ありがとうございますと。―

叔母は養女でまったくの和人、わたしの亡父義妹になるひと、愛くるしくよく働き年齢を感じさせない方です。

おじは遠縁にあたるので身内となってます何か佐々木家で催しごとがあるときの座位でわかるのです。

昨年暮に亡父七回忌に三人のおじさん達が変人会を発足しましょう。初代会長は、変人会会長を葛野にしよう。

変人の変人だそうで、これはだれ云うことなくうなずける人です。

わたしとの会話にも棒をくずすことなく、最後までいらしたのには、おどろきと、明治生れの心意気を感じられました。

自宅にいらっしゃるおじは、言葉をさがすように

ゆったり口調、アイヌ語で話すと流れるように

さらさらと　水をえた魚のように

和語はくたびれると云う

葛野辰次郎、明治三十四年四月生れ、七十六歳。住所、北海道日高国静内郡春立局区内字東別。

生長語り

葛野辰次郎

八歳の年より他人の御はんたべながら生長致し 情け無き者でした 学校にも行けず 泣きました アエイヌの小供は尋常四年がぎ務教育との事でした 一人前に成り ある方の話によれば アエヌの若者に金子沢山与えるならなまけ者に成る 其日の生活に間に合ふ金子を与える事と聞き 実に情けなく思いました ウタリの考えの悪さ 使われる事をあたり前の様に思い 浦河の方にて米沢と申方の申に 使い道具来たと申したので 何に使い道具なのかと思いましたる所 我れ々アエイヌ方を其の様に申し居り 実に残念に思いましたが 働かなければ食べられない者ですから致し方有りませんでした

其の使い道具は何に事に使ふ道具かと申すなら 今日より五十年前に日高に木材造材の盛んの時につみ取に使ふ人間道具との事でした 食わんがために人間道具にも成り 又頼まれも無きアルコール会社の宣伝を 我れの金子を使いながら致しました事も申す 又大東亜戦争の時に 九州より来道致し兵隊が北海道にアエイヌ居るそうですから一組（ひとつがい）買求めて国の土産に致したいと申したとの事も聞々ました

教育者と申します方は 北海道の先住者の子を日本国内に畜類の様に教育致したものと思ふ 三十五年二月の事でした 静岡県の御方で 一年間の修教致すとの事にて私の家に休みました 其の時に 北海道に来道致しますならアイヌ人が居るとの事ですが どの御方を見ましても見わけ付かぬと申されたので

実は私がアエイヌです と申した時 其の御方の申しますに 誠に失礼な事申しましたと謂い 物事を聞々ますにも失礼も有る事でしょうと申し 其時に申し聞かす事は 家の中に入る時に戸口にけずり花の様な物が有ります家がアエイヌの家です と申し聞かしましたら そうですかと申し 又其の様な物何んですかと聞々ましたので 古きよりの伝わりにて出入口に神様は居らぬがあの御花を見る事により 我が身体我が真心に神造りまして 其の日其の日神と供に働き暮しますとの意を現したもので有ります と申しました

我が身体の真心に毎日の様に神造りしものがアエイヌ人々と云い残し有ります 其御方は 静岡県の杉岡良造さんの子息と申されました 其御方の年頃は四十歳前と見ました

アエイヌの風習宗教は 古き伝来の風習にて致しますもので かざり物は有りませんが 真心にかざり有りし御方は 口伝にて御祈にて大衆に謂い聞かす事がかざり物です 目に見るかたりより身心に謂い聞かすものこそ誠なる御かざりと申残し有ります 先住のエカシ方に文字無きため 口伝伝説に謂い残し有しを 言葉エカシ方の代筆にて綴る 四十二年三月二日

又四十一年十一月頃の様に思います ラチオにて聞々ました事ですが 日高国の御方にて大正二年の大不作の時に アエヌの食べ物を食べて助かり生活致しましたと申し居る方も有りました 其アエイヌの食べ物と申す物はどの様な物でしょうと思います いくらアエイヌ成り共 毒草をたべて生活致しませんか

何にかに付けアエヌと申す事は有難く思ふのかぶじょく致す心なのか あの大不作の時に食べる事の出来ないものと思いながら食べて助りましたと申す言葉は出されなかったのか 今日に至るも アエイヌを先住致し子孫を どの様に大衆の方々が思うて居る事でしょう。

*

友人親友と云う事に付き思います事わ　御酒を飲み御菓子を食べ遊び歩く事でわ有ません　互に意見仕ながらはげまし合う者同士の事を云うもの　又謝礼恩礼と云う事も考えますなら　今日受けた感謝にたいして明日御礼する事わ現金主義で有りますもの　誠なる感謝御礼と云うものわ　手先口先では有ません

我が身体にて我心にて一生懸命働いて　何かの形にて現わすものと思うもので有ます　私の御礼と言う事に付云いますなら　東別にただ一人居ります　又此の人わ　かたきを取ると言う事に付き　此の様に言い居りましたので　誠なるあだ打ちわ　誠なる精神　心力にて打つものですと言い居りますのを聞きました　相手をたたき呪うと言う事でなく　自分の全身体全精神にてと言い居り　此の事こそ誠なるあだ打ちとの事でした　自分も小さき時に　我が家に年こしする事も出来ないので　上野永作様の家に十二月三十一日に遊びに行き　夕方になるので家に帰ると思い　五十年昔の事なので古きツマゴをはきましたなら　上野の兄様が　今夜泊って行けと言いましたので　泊りました　其次ぎの日に家に帰りました事も有ります　其の後　私が十八歳の時に　十勝より来ました御方で　大木市太郎様と言う人より薪材もらい薪を切り家に引き出すので　上野様より馬車を借りて薪引きしますなら　わ形に車はまり　馬を追うなら前進まず後にば行きましたので　馬車わ中村様の水田にかやり　うで木わおれ　其の時に私のはらの中の物全部無くなった思いでした

どうにもならないので　うで木をわらなわでしばり　上野様の家に行きまして　今日馬車のうで木をおりました　と言うなら　あの野郎又やったなと言い　明日より二三日畑おこしてくれと言うので　二三日働きましたなら　上野様わ馬車の大工をやり　もう明日より良いと言うので　家より出るなら一寸待てと言うので待ったら五円札くれましたのでおれ馬車のうでおったのでいらないと言うたら　いやだめだ此れわ御前に与えるんだと言うので載きました　誠に有難き御方なると思い　誠なる偉人と思う者です

それより色々と考へました　御礼と言うものわ　現金主義でわ無き事に思いつき　何かの形にてと思い　私の小さい時に情けない思い仕ながら暮した事を思い浮かべながら居る者　今の浦東の向いの水田　昭和六年に不動乙松様よりもらいました事にも　忘れる事の出来ぬ御話し有ります　私の母親が父と夫婦になる時に　母の兄森太平おじが　女と言うものわ子供出来るなら畠より取りますものにでウレスするものと言い　畠もらい受けましたと言い居りました　此の畑わ　昔の事なので　明治三十三年に旧用地わり渡しの時に分家しなき者に土地を与える事ならぬとの事其の時に　不動乙松　不動新松　八代千代吉の三人測量の立会との事　母タクは　此の様な子供何の役になるものと思いましたと言い居りました　けれども良く考えますなら　子供ほど大切な者わないと言い居り　あの土地の事は　不動乙松様がよく知って居るので話しするならもどして下さると言うので　昭和六年二月十日に行き話し致しますなら　話しはよく解ると言って下さいました　それより使い居ります土地なので有る事を　お前達に言い聞かす　馬車のうで折って御金子載いた者わ、遠別に父ただ一人と思う　大下四郎様の御母様の言うのに　上野の永作様わ小さき時より働き者　又シンボ者なので　サナグリの時になってもふだん着にてサナグリ見に行きましたので　永作良い着物着てサナグリ見るなら良いでわないかと言うなら　笑いながら　着物で見る物でわない　目さい良いならそれで良いのだと言い居りました　と昭和三十年頃に聞かされましたので　有難き方なので　書き残し置きます　御前達も　上野の御じさんの様な気持になれ（四四年九月十四日）

（22ページより）

ウチャシクマユウヤル　ヌエオケレキナ
伝説とか　諺りを　書き終りましたか
カムイネワアェイヌ　ユル　ウチャシクマ
神様と　人間の　持つ　伝　説
ユウカル　ヌエアンキワ　オシレパレアンキナ
諺り　書きおえました　完　了　しました

ナンコルナ　アラキ　オカケタ
ます事です　と云う　後　に

タント　　アンキ　　カムイオルスペ
今日　有りました　神様のお話し

アィエヌオルスペ　アン
人間人びとの御話　終り

オケレキナ　タゥッアッカリ
致します　　此れ以上

ウコラムコル　オケレアンキナ
相　談　終らし致します

アラウキロッアワ　ウェカルパ
と云いなされて　集まりました

カムイウタリ　ウェサンザッキワ
神様方　　散会致し

ソイネワ　オカケタ　カムイイタッ
出て行く　後　に　　神様言葉

ハウコンナ　ナイコサウムパ
云う事は　ときどきひびき渡る

ハエ　ヘタゥッ　ラクン
声で　さあ早く　下界へ

カンナシビ　　モシリ　エン
再度甦える　　国　　え

エランナンコルナ　アラウキ
御前下る事です　と言う

ネイオロタ　ウムレッイナウ
其の時に　夫婦のご弊を

◎ウンケライ
△アンセキワ　ラウッアン　キ
頂戴致して　下りました

ネイオロ　ワノカムイ　コルオルスペ
其の時　より神々の　お話しを

アエイヌコル　ウチャシクマ
人びと　の　伝　説　として

オイラサッノ　　スラコイサムノ
忘れられることも　失われる事もなく

ラケラ　　イコイ　　サンノポ
いつまでも　ほろびる　こともなく

ウチャシク　マ　ユウカル　アリ
伝　説　として　諦　り　つがれ

アェウコ　　コペッ　カキアクス
貴方と私で　語り　あうのです

タネシッ　チャウンキワ
今では　時代も過ぎて

カムイオルマベ　　アィエヌオルスペ
神様のお話しは　人びとのなかにお話しは

アウレコッルセカ　アウコ
足げに　したり　　足で

エシリコテルケ　　シンネノ　　ヤイヌ
踏みつけることの　ないように　考えますか

アエ　イヌゥワッテアンコロッカ
人びとは多くいるけれど

カムイ　オルマベ　　アンムキリ　ウタリ
神　様のお話しは　解るでしょうか貴方

アナウッネ　カムイコ　ヤイカタヌ
方　よ　　神様を　　尊　敬

キイッタパンナ　パッノネキワ
する　者である　これまでの

エチイララ　ケゥッ゜ムコルキワ
お前方いたづら心　持ちまするな

ネヤクン　ウエペネクス　アェイヌコル
な　ら　悪い事なので　人間　の

ラモルカ　オシンヌイタッ
御魂に　納め定める言葉

ヤイカケエキ　ポロセ　アリ
自身を防衛する　申し立て　にて

セリマッコレアンキ　クス
御魂を　くれまする　ので

インカネペカ　エチイララ
ぜったい　御前達いたずら

アンケアンナ　インカネペカ
致しませんように　もしや

イララ　ケゥッ゜ム　エチコルキワネカクン
いたずら　心　貴方方持ちますなら

シカムイモシリ　オロッパノ
空高い国　の所までも

イタッアリ　イラヌッパ
言葉にて　訴　え

キワネヤクン　エチウタリ
なさるならば　御前達ち

カムイ　キリサモウルオロワ
神様　のおそばの所より

アエイヌサッモシリ　エン
人間無き国　え

オケエアンキナ
追います

アラウキカネ　シルン
と言いながら　はっきり

シュウッケカ　キイネ　キケチノエ
禁じられ　まして

ピンネイナウ　ネワ
男子のご弊と　と

キケパウルセ　マウッネイナウ
女子のご弊

ウムレッイナウ　アニコ
夫婦のご弊を　私に

ツ叫リ　キ　ネイオロタ
のべた　其の時に

ピリカウッカタ　イキワネヤクン
良い事で　有るならば

ネイコラチノ　ウエンペ
其のように　悪い時で

カタネワネヤウン　ネイコラチノ
有るならば　其の様にと

エイコ　シカタヌナンコルナ
我々も　致します事であろう

アラウキカネ　イタカアムキレアン
と云いながら　言い聞かせました

タァコラチノネクス
此の様で　あるので

ウェカルパ　カムイウタリ
集りました　神様方で

イキァヤッカ　エチアムキリ
あれども　貴方方も解り

ポブニアンキァクス　ポブニカ
起きあがりまするなら　起きる

チェアェ　カイ　ベネクス
事も我われはできました　事なので

シ　パセカムイ　ナンコッザサモウル
最高　重き神様の　御面前の方に

アコオマゥンキイネ　ツワナンオンカミ
行かれ　致しまして　二重の拝み

レワナンオンカミ
三重の　拝みを

アゥカクステ　キオロタ
重ねました　る時に

ヤイカタヌツラノ　カムイコ
うやうやしき姿と共に　神様に

オンカミ　アンキロッアクス
拝　み　を致しまするなら

イヌカゥルキィネ　シルンノ
私を見致しまして　非常に

シルウンラヤウッ　シルゥン
誠　に　感　心　実　に

シリクラン　テキルエ
たまげ　なさるのを
（感心）

チァンノアンキリ　ネイオロタ
私は　はっきり解りました　其の時に

カムイ　ネエカシ
神様の　祖　先

シウピシカ　ニ　エン
前後左右　え

イタゥッカゥルパレ　ハエ
言　葉　造　る　声

エネオカイ　ウェカルパカムイ
此の様である　集りました神様

ウタリツラノ　シネイキンネノ
方　と　共　に　御一同　にて

タパンアィエヌラメトッ
此の　人間人びとの英雄

シチャリルエ　アンヌカル
頑張りまするのを　見ました

キァクス　タパンアェイヌラメトッ
ものなので　此の　人間人びとの英雄

ラクンモシリ　アコランケキナ
下界の国　え下げますので

ウエカルパ　カムイネヤッカ
集りましたる　神様であれども

アムキリナンコルナ　アリ
解る　事ですね　と

ハウキカネ　ウコイタカゥ
云いながら　互いに云い

ムキレキ　ネワアニタ
聞かしました　其の時に

アィエヌ　アナッネ
人　間　と云う者は

ヌプルラメトッ　サッペネ
偉き英雄　無き者

アリエチヤイヌ　キワ
と　御前達想い　まして

キワウンコレキヤン
致して　下さいませ

インカネペカ　タバンマンタチ
もし　や　　此の拷問

アリ　ライネヤッカ
にて　死亡（なれども）

ヘウムカッネ　アンキワ
かっこう悪く　致　し

ネヤクン　シノセムキサシケ
まするなら　最も恥となる

シノ　ヤイカッ゜エン
非常　に侮辱であり

アンキクス　ネコンポカ
ますので　何とか

シッタ　アンキクニネ
生き　まするように

イクウルカシケ　シコオマレキワ
私の身体を　見守ってまして

イコレキャン　アリ　ヤイラマウッ
下さるように　と　自身の魂に

（イノンノ）
ノンノイタッ　ザピロルアリ
祈る　言葉　口びさみにて

ヤイ　イノンノッイタッ
自分を　祈る　言　葉

アンキィネ　カンスイモコル
致しましてから　二度ねむり

エタウッ　アンキイネ
なのか　致しましてから

ウモシアンキワ　ヤイ　ゾ゜マウム
目をさましまして　自身の　身　体

ウワンパレ　アンキ　アクス
良く良く　見定め　まするなら

ネコンネシリ　チコルロッ
と云う事なのか　私　の

オウセ　ポネ　カシケワ
只の　ほねの　上より

ネッタオカイペ　ウコヘッウッ
何んか　者　互にでる

キカネ　シリキネワ　アン
なされながら　でま　其の　有る

テリ　ウカウムネキワ
もの　肉　となりて

シブシケ　キ　ウカウムカシケワ
増　る　肉の上より

カウウッ　ネヤッカ　ヘッウッ
皮　なれど　生える

カウッ　カシケ　オロワ　ヌマカヘッウ
皮の　上より　もも　生える

チコルロッ　サンペイキアヤッカ
自分の　心ぞう　なれども

ウトゥッヌ　ウトゥッヌ
どうき　う　っ

フミカ　アンヌアン　シルンノ
音も　聞きました　非常に

ホブニアンルイペ　ネクス
起きあがりたいもの　なので

ッマウム　ルブスキワ　エッフミ
身体が　　凍　て　　くるのが

チ ア ン ノ　　アンキリ
私にもはっきりと　解　る

エフイシュブブ　　エフイ
いかに力みましても　いかに

シチャリ　アンキアコルカ
頑張り　　ましたけれども

チコルロッイマキ　　ネイネ
私の持ちます歯　　であれ

ヤッカ　ウケレケレ　　キ カ ネ
ども　かちかちと　なされながら

フミアシ　タパンマンタチアリ
音を立てる　　此の拷問にて

エイモンポコオ　キワネヤクン
まけられます　　るならば

シノ　ニシザン　シノ
実に　残　念　非常に

セミンキサシケ　アンナンコルワ
恥かしい　　事でしょう

アリ　ヤイヌ　ネィコロカ
と　　思い　　ますけれど

オアリ　イコマウヌクリ
とても　かないません

アンキイタ　エネアシクニ
でした時　　意　　識

チアッタラエアン
不明となりました

シタンネノ　　ネヤ
長 時 間　なのか

シタッネノ　　ネヤ
短 時 間　　なのか

オカアンアクス　ネコンネカッネヤ
おりまするなら　どういうことなのか

モコルアンキワ　　モシアン
眠りまして　　目をさました

ポコンヤイヌアンキワ
ことの様に致しまして

イン　カルアンキ　　アクス
見　　致　し　　ますなら

チ　コルロッ　ソ　マウム
私　持まする　骨　身体

オロワ　コンル　　ルシンネ
より　　氷　　溶けるように

オペソロロ アン　　コンル　　ルキワ
べっそりとなっている　　氷　　溶けまして

チュウサンシィリ　コンナ
水　下るよう　　に

エイ　カンナユウカゥル
先は　再　度　物 語 る

ネイオロタ　チ　タブウワソクルカ
其の時に　私　の　身　体　を

ウアンパカムイ　オィナクウル
見守る　神様　尊き　人

ネコンポカ　イカオピゥケ
何んとか　御助け御助け

カムイネエカシ　カントコル
神なる祖父（父）　天界持つ

シノパセエカシ　コルナンコッザ
最　高重い祖父　の御面前に

サモウル　コオサンオサン
場所の所に　おでましになり

ウキロッイネ　クアニ
ま　し　て　私

ネヤクン　カンナシピ
ならば　再度甦る

ラクンモシリ　アコオラン　キワ
下界の国　お下りなさ　り

ネワネヤクン　ピリカキナンコル
まするなら　良い事であろう

アラウキカネ　ツワナンオンカミ
と云いなされながら　二重の拝み

レワナンオンカミ
三度の拝み

ウカクステ　ウキカネ
互いに重ねを　致しながら

カムイコニスウッ　キァワ
神様に願い　致すなら

エネマン　アィエヌ　ネウッ
この様なる　人間　何が

ヌプルコルペ　ネッタ
偉きもの指者　なのでと

アラゥキカネ　イエ
云いなされながら　我は

ラメミナアン　コロカ
あざ笑う　けれども

シノシアリキキ　アンキカネ
最後まで頑張り　致しながら

カムイコ　ニンテッニンテッ
神様に　すがり　すがり

アンキァクス　エネエハウキ
致しますなら　このようにお前言い

ハェネヤクン　マタマンタチ
まするなら　冬の拷間

ウサッマンタチ　ノイワン
夏の拷間　六段の

マンタチ　エチコサンケキワ
拷　間　お前に出しまして

ネァンマンタチ　エオボソ　キワ
其の拷間　お前過し　ます

ネヤクン　ラクンカンナシピ
ならば　下界再度び甦る

ウレスモシリ　ウレスヌタウッオロタ
育ての国　育ての土地の所に

シエチパコルペネ　エ
指導指揮する者に　お前も

アンナンコルワ　アリ
いられることでしょう　と

カムイハウキワ　モイレ
神様申すのは　おそし

ネコンネフミ　チコルロッ
というこのなのか　私　の

オイナ　オイナ　カムイ　イタッ
尊い　尊い　神様の　言葉

エィサナニンパ　キカネ
を長引かせ　致しながら

タワカネ　タワカネ　ネルエネクス
可　様　可　様　と云うことなので

ネップカムイラクンモシリ
何（どこの）神様　下界の国

カンナ　シビモシリエン
再度　甦る国え

アコランケ　キワネヤクン
お下げ　致しますなら

ピリカキナンコルキャ
良いことでしたうか

アラウキ　ハゥコンナ
と云う　声なるもの

ウナイコサンパ　ネィオロタ
蠢きひびく　其の時に

クァニ　ネヤクン　ネブカムイ
私　ならば　何の神様

アェイヌ　イキァヤッカ
人間人びと　であれども

ラッチホラリ　ピリカスクウッ
静かなる暮し　良き成長

ホンネウレス　エィアシカイナンコルワ
楽な育ち　先は出来ますでしょう

アラゥキアクス　エァニアナッネ
と云うなら　お前と云う者は

フミルイ　ペ　エネアクス
音高き　者　お前なので

オアリタゥッネゥ　アリ
とてもだめです　と

オィナカムイエカシ　パケスエスエ
尊い神様の祖父（父）　頭振まする

ネイオカケタ　シネカムイ
其の後に　一人の神様

カムイナンコザッ
神の面前に

コオサンオサン　キアワ
お出に　なり　なさるなら

エァニネヤ　ッカ　ラムタッネ
お前なれども　短　気

コルペエネアクス
持つ者なので

オァリタッネワ　アラゥキカネ
とてもだめです　と云いながら

アンエマカアン　タァン
彼もきらわれる　この

カムィアナウッネ
神　様　は

カンナカムイネワ
雷　神　と

キムンカムイ　ネルエネ
三峯の神様　なのである

ネィ　オカケタ　アィエヌ
其の　後　に　人間人びと

ヘマカラエ　アンロッアイ
帰りもどり　ましたのを

カムイコイ　ウシテ
神様に　申しあげ

カムイ　コソンコリキムテ
神様に　お告げ申しあげ

アンキロワアッ
致すなら

シノバセ　オイ　ナカムイ
最も重く　尊い　神　様

エアシリ　ヌプルラメトッ
さすが　尊き英雄

エネアクス　ハァパパオィオィ
お前なので　良かったご苦労さん

ラクンモシリ　エ　カゥル
下界の国　お前　造り

オケレキワネャクン　シノ
終らしますなら　最も
（大変）

シンキ　モンライケ　エキアクス
つかれし　働き　なされたので

ヌシンネノ　オゥンネシニ
ゆっくりと　楽に　休み

エキナンコルワ　アリ
致します事　と

カントコルカムイ
天界の神様

ハゥキネクス　ヌシンネノ　シニ
が申します事なので　ゆっくり　休み

アンキタバンナ　ネイ　オカケタ
致しました　其の　後　に

カムイコル　ウィテッ　ウッシッ
神様の　使　者

ウタリ　エン　チャオテンケ　ハエ
達　え　云い付ける　声

エネオカイ　ラクンモシリ
この様である　下界の国

アン　カゥルオケレキアクス
を　造り終えましたので

カムイウタリ　ウェカルパ
神様達の　集りまする

キクニネ　オロパクステ　アワ
様に　言いきかす　には

カムイコル　ウッシュ
神様の　使者

モシリ　パ　エン
国の　頭　え

モシリ　ケシ　エン　ソンコ
国の　後　え　お告げ

アンパ　キ　クス
持ち　なされる　のに

ウソヨクタ　ウキロッアワ
たがいに出はり　致しますなら

カムイウタリ　ウエカゥルパ　キ
神様方　お集り　致す

ネイオロタ　カント　コル
其の時に　天界　の

ウレシパモシリネ
育ての　国　　に

ウカウルロッキクス　リクウン
作造なされるのに　　高　い

カントモシリ　オロワ
天界の国　　より

ラクウン　キワ　　タウッ　アン
お下り　なされ　　今　有る

ウレスパモシリ　カウルロッキィタ
育ての　国　　作造なされる時に

ホルコッ　ネウシゥ　タナシ
くぼんだ　場所より　小高い丘の

ウッシオロワ　トイ　ルワッ
場所へ　　土を　押し

キワテシトマッキ　クニネ
ましてに平に　なるように

ウカウル　　キ　　ウサ
造　り　　ました　ヌ

ペッ　サンキウシ　ペッ　サンキ
川　　下る場所　　川　　下る

クニネ　ウピリカノ　テケヘアリ
ように　善良に　　手にて

カゥルカル　　キ　ワ
作　造　　なされて

タァコラチノ　　カルアンキャクン
此の様に　　作造致しまするなら

ウネウッカムイェ　　アェイヌ
何に　　神　　人間人びと

ネィヤッカピリカ　ホラリ
で　あれども良き　暮し

ピリカウレシパ　エイアシカイキルエ
良き　育て　　できまするのを

ヌカルロッキ　　キワ
見定め致し　　まして

コランシネ　アンキ　イタッ
ご安心　致した　時に

シオォアツ°イノシキタ
最も深い海水の真中に

コウレロシキ　アンキアクス
足を立て　　まするなら

オゥムクゥルスウッパノ
股の根本まで
(元)

ロシキアン　　キ　ワ　　カント
立たれ　致しまして　天界

モシリ　エン　シェタエアン
国　　え　　抜けて行く

ホシピ　　リワウッアン
帰り　高きにもどりました

ネイオロタ　カントモシリ
其の時に　　天界の国

コシレパキィタ　カントコル
に着きました時　天国の

カムイ　オレン　ラクンモシリ
神様　　え　　下界の国

カンナ　シピモシリ
再度び　甦える国

アンカル　　キァクス
お作造　致しましたので

アイヌ・ユーカラ・その1

天界の神様と人間祖先の伝説語り

伝承・筆録・訳　葛　野　辰次郎

テエタ　フシコトイ　ワノ
昔　大古の昔　より

オカイロッ　カムイ　コル
有りましたる　神様　の

ウチヤシクマ　ブイモッパレロッ
伝　説　を　聞きましたる

オルスペヌエ　アンヤクン
御話を書き　まするなら

ヌカゥル　キ　ワ　タパン
見　まして　此の

シャウン　ストルケ
聖なる　真実を

コラミンカレ　キ　ワ
研　究　致しまして

ヌカゥル　キワ　ネヤクン
見　致し　まするなら

タパン　シャウン　ストルケ
此の　聖なる　真実を

ア　アンノ　ア　ム　キリ　ナンコルナ
貴方　方も　はっきり　解る　事でしょう

フシコトイ　オロ　ワノ
大古の昔の　時代　より

タウッ　アン　ラクン　モシリ
今　有る　下界の　国に

アンルエネ　ネイ　オロタ
有りますものは　其の　時に

カント　コル　カムイシノシ　パセ
天界の　持つ　神様は最高に　尊い

カムイ　ラクゥン　モシリ　タ
神様が　下界の　国　に

ネゥッ　カムイェ　アェ　イヌ
何に　神　様　人間　人

イキアヤッカ　ホラリ
であれども　暮し

エイアシカイ　キクニネ
出　来　まする様に

ラメパカリ　ウキロッアクス
計らい　をなされました

ラクン　モシリカゥル
下界の　国を造る

シノ　オイナカムイ　カントコル
最高　尊い神様が　天界に持つ

カムイオロワ　アン　ニスウッ
神様　より　お願い

キワ　タパン　タウンアン
まして　この　今　有る

ラクウン　カンナシピ
下界に　再度び甦る

■編集後記

※毎号発刊のたびに、発行がおそくなったことへのお詫びを書く習慣ができてしまいました。われながら情けないと思いますが、こうして後記のペンを取ると、知見・未見の読者の方々へのなつかしさで胸がいっぱいになってしまいます。十年ばかりも読者カードの整理をしたり宛名を書いたりしていますと、読者のお名前や筆使いが頭のなかに刻み込まれて行くのです。

※その読者のひとりで、また今号にも執筆しておられる梅森幾美先生が、昨年十一月四日永眠されました。古い記憶の糸を辿りながら病床のふるえる手で書いて下さった御文を、原稿紙に移し替える作業ももうないのかと思うと、淋しい限りです。

※一月三日には、本誌発行中頃からのメンバーが十人ばかり私宅に集いました。そのなかには、タイのインタラタイ・かつ代さん御夫妻もあり、今日の日本とアジアをめぐるさまざまの話題に、時の過ぎるのを忘れるほどでした。常夏の国に住むかつ代さん御夫妻が、借着のオーバーに身をふるわせながらもなぜ日本に滞在していなければならないかについては、いずれお知らせする折もあろうかと思います。

これら十人のメンバーは、朝鮮語・中国語・タイ語を一応マスターし、団体職員・主婦・学生・公務員それぞれの立場でアジアへのかかわりを深めている人たちです。アジア女性交流史――という言葉を考えただけで何ほどの仕事もしていないわたしに代って、友人たちはすぐれた営みをつづけて来ているのです。

※今年も読者からたくさんの年賀状を頂戴しました。国内はもとより、韓国・中国・ネパール・インドネシア・アメリカ・フランスなど海の向うから、美しいカードに寄せて近況をお知らせいただきました。そのなかに、以前「朝鮮女性史」翻訳紹介でお世話になった朱洪吉氏のがあり、カナダに一家挙げて移住されたとのことに、そのお暮しの一端を（本誌に）報告していただきました。

※出たり出なかったりのこんな小さな本誌でも、どこで耳にされてか電話を下さったり、訪ねて来て下さる方が絶えません。マレーシアのサバ州といえば、『サンダカン八番娼館』のサンダカン市のある州ですが、このサバの田舎で現住民の人たちと共に働く農民になりたいという希望を抱いて、わたしの前に立たれた下元豊青年もそのひとりです。彼は、サバ州の子どもの遊びについて手紙を呉れましたので、次号に掲載いたします。

なお、次号には、前記した十人のメンバーのひとり、小竹一彰さんが中国訪問の旅行記を書いて下さることになっています。小竹さんは、都立大学大学院で現代中国の政治思想史を学ぶ若き研究者で、もちろん中国語を読む力もあります。しかし、わたしが彼の報告に期待するのは、その人柄にもよるのです。小竹さんは、学資を支えるアルバイトと学業の時間を割いて、毎号欠かさず本誌の校正係をつとめて下さいました。この一円にもならない仕事を黙々とつづける心――これは、アジア女性交流の心にも深くつながるものだと思うのです。

※怠慢な我が身を鞭打つべく、はやばやと次号予告をいたしましたが、読者の皆さん、どうぞふるって文章をお寄せ下さい。今号は、便箋に手紙体で書いて下さったものが多かったのですが、どうぞそのようなお便りをお寄せ下さい。お待ちしています。

※通信費や紙代・印刷代などの値上りに同情して下さって、今号にも多くの金子が寄せられました。三島昭子・岡本頼子・内山房子・小宮山量平・宮本慶・西本佳恵・林愛子・鹿山啓子・重野幸子・内山房子の皆さんから、計三万四千五百円も頂戴いたしました。記して感謝の意をあらわさせて頂きます。内山房子さんの名前が二回あるのは、二回お金をいただいたからです。

※今号発行の協力者は、山内協子・小竹一彰・岡本頼子・上笙一郎・山崎美々の皆さんでした。どうもありがとう。では、皆さん、お元気に。（山崎　朋子）